

スポーツ環境及び高校入試制度の在り方検証委員会 第3回会議 (概要)

1 日 時 令和8年1月19日(月) 14:00～16:30

2 場 所 秋田県庁第二庁舎8階 公営企業課分室

3 出席者 検証委員会委員 20名

4 議 題

- ・これまでの審議の状況について

5 協議における委員からの主な意見

<論点1>アンケート結果を踏まえた本県公立高校の入試制度の在り方 (検証の在り方について)

- ・アンケートで入試制度が影響したと答えた割合は、県外進学者の回答数から考えると多いと感じる。すでに進路が決まった後に回答したために影響なしとした層もいることを考えれば、相当影響があるのではないか。「少数にとどまった」との記載には納得できない。
- ・入試制度は全生徒に関わるため、現行制度の検証は別途行うべきだ。入試制度とスポーツ環境とは視点が異なるため、深掘りするのであれば議論する場を分けるべきではないか。

(現行制度について)

- ・保護者の立場では、秋田県の入試時期は非常に遅いと感じる。二次募集の場合、準備や制服購入の日程が過密で負担が大きいため、ゆとりが欲しい。また、各校で受検せずとも大会場で一括実施するなど、入試の省力化も工夫できるのではないか。
- ・多様性に対応するために設けたのが、前期選抜のねらいだったはず。子供たちは早く進路を決めたいという思いであり、私学を選ぶ理由もそこにある。公立高校も私学と同じ考え方で、早く決められる選択肢を広げていく必要があるのではないか。
- ・入試制度そのものよりも、スポーツ環境の充実の方が本質的な課題の改善につながると思うが、自分自身の経験からも、現行制度では受検機会が少なく選択肢が狭いと考える。心理的負担も大きいため、挑戦の機会を増やせるよう入試制度の柔軟性も必要だと感じている。

(その他)

- ・アンケートの自由記述には入試時期を早めるべきとの意見も散見されるが、私立高校の立場では、公立高校が3月に選抜を行う状況はありがたい。私立高校は1、2月に入試を行い、早く進路を決めたい生徒を確保できており、実情に合っている。
- ・早く決まるから私立高校を選んだ子もいるが、推薦でも勉強は疎かにしていいわけではない。また、経済的事情で県外進学を断念した子の話を聞くのは悲しい。そうした状況も、どうにかできればと思う。
- ・県外進学したもののうまくいかずに帰りたいと思う子供もいるはずだ。転学した場合の大会への出場制限等のルールも含め、そうした子供たちを救い、守ることも公立高校の重要な意義ではないか。

＜論点2＞県内公立高校における生徒募集の柔軟化

（現状の課題）

- ・人口減少が深刻な中、スポーツで県外に進学する現実がある。有望な生徒は確実性を求めて早く動く私学に流れている。そうした中で、私学は1年以上前から声をかけることができるが、県内公立高校は個別に動くことができない。その背景には「高校の募集要項が9月にならないと公表されないから、それ以降だ」という話があるが、募集要項の公表を6月に早めるなど、何かできることはないか。何を解決すべきか深掘りする必要がある。
- ・公立高校においてスポーツ環境が整備されることは嬉しいことだが、文化部や学習活動との均衡も考えなければならない。県外で多くの選手が高い意欲で練習に励んでいる。県外進学は当事者には幸せなことでもあり、親元を離れる時期の違いだけでも思える。また、県内私学の指導者も頑張っているが、公立高校に準じた勧誘制限があり、県外に遅れを取っているジレンマがある。

（具体的な募集活動の開始時期について）

- ・募集要項の発表を早めれば時期の課題はクリアできると思う。ここで結論が出ず年度を跨げば、さらにスケジュールが遅くなるのではないか。可能であれば、今のうちに早める方向性を詰めるべきではないか。
- ・中学3年生の1年間は成長や変化が激しく、9月以降により早く自分の将来の選択に向けて考えられるようになる。時期を早めれば良いというのは短絡的であり、課題が解決するとは思えない。方向性を決める際は、現場の声に耳を傾けてほしい。
- ・求める生徒像の公表前に、競技実績等だけで声がかかり、合格が決まったような形になるのは、中学校の進路指導としては適切ではないと考える。県全体の方針が示されてからでないと説明不足も生じるため、募集要項説明会后に個別の具体的なやり取りを開始するという点は中学校としては譲りがたい。
- ・高校側は合格を確約できないため、勧誘には慎重にならざるを得ない。時期を早めた場合、引退後の成績推移などを見極めることが難しくなる。高校入学後に、部活動と勉強を両立し、3年間頑張れるかを判断するのが難しくなるのではないか。

（現行の取り決めについて）

- ・秋田県では競技団体による情報発信まで制限されている印象がある。「こういう学校や活動がある」という生徒との情報のやり取りすら制限されていると感じる。
- ・他県の強豪校では、秋田県出身選手が活躍しているが、秋田県の公立高校も対等に頑張っている。試合会場で中学生に「一緒に全国大会を目指したい」という思いを伝えることすらできないルールはもどかしい。指導者の思いが伝わるような、柔軟な制度が必要である。
- ・県内のルールが県外の私立高校等には適用されていない現状がある。県外から直接本人に声をかけることに、何らかの歯止めも必要なのではないか。県内と県外で平等になるようなルールを作るべきだ。
- ・募集活動という言葉が一人歩きしていることに違和感がある。校長をはじめとする教員は、自校の活性化のため、部活動で活躍してくれる生徒に来てほしいという思いは常に持っている。ただ、具体的に動き出すのは9月中旬以降に統一されており、それも、中学校への意思確認にとどまるもので、合格の確約はできない中で、中学生への直接の勧誘はしていない。私学のように学校の魅力発信には力を入れたいが、個別の生徒の指名には慎重にならざるを得ない。

(今後に向けた提案)

- ・地域展開が進む中で、中学校の先生が部活動を指導できなくなると、高校とのやり取りが困難になるという懸念がある。生徒は環境の整った県外私学を選びがちだが、公立高校には、生徒の将来のことまで親身に話してくれるという強みがあると思う。温かさや地域との繋がりをアピールすることが、秋田の魅力になるのではないか。
- ・県北・中央・県南の会場で、中学校関係者や保護者に向けた合同説明会を開催できないだろうか。
- ・公立高校でも外国人留学生を受け入れられるよう、日本語指導も含めた受け入れの枠組みがあれば、グローバルな視点での魅力あるチーム作りにつながると思う。

<論点3> 県内の高校におけるスポーツ環境の充実に向けた方策

(指導者の確保について)

- ・他県では指導者の異動で2桁の生徒が転校した例もあり、指導者や環境の重要性を感じる。秋田の公立高校も魅力化が鍵だ。スポーツ立県でありながらスポーツ専門学科がないのは不思議だ。無理だと思わずにできることを探すべきだ。
- ・トップ層だけでなく、部活を続けたい全ての子供のために、まずは足元の部活動を充実させるべきだ。また、地元出身の専門的な指導力を持つアスリートが、指導者になることを望んでも教員採用枠がない現実もあり、なぜ採用できないのか疑問に思っている。
- ・秋田で子供を指導したいと思っても、働く場所がない。教員として採用されないことを理由に、指導に関わらなくなるのはもったいない。部活動指導員という枠組みを含め、指導者確保を真剣に考えるべきだ。

(魅力の向上について)

- ・「秋田でもできる」という雰囲気を持たなければ県外進学は止まらない。指導者の影響力が大きいというアンケート結果もあり、秋田の高校に魅力がないと言われる現状を変えたい。「秋田でもできる」と思える環境作りを進めるべきだ。
- ・私学は生徒が来なければ破綻する。公立も特色あるものを作り上げ、学校全体の魅力を高めるといって、私学のような危機感を持った考え方が必要である。
- ・指導者という立場に重きを置くべきではないか。秋田の選手が県外で活躍する一方、今の公立と私立の差を考えると流出を完全に防ぐのは難しく、なぜ秋田に残らないのかを考える必要がある。拠点の形成については、散らばって競い合うことでレベルを上げるという考え方もある中で、拠点を一箇所にまとめることが良いのかの検討も必要である。

(その他)

- ・企業の採用計画のように、将来を見据えた長期的プランが必要だ。秋田でも出生数はすでに決まっており、その人数に基づいた募集定員や学校の在り方を予め決めておくべきである。教育庁としても、そうした計画的な進め方が大事ではないか。
- ・指導する教員へのバックアップが必要だ。また、スポーツ環境と入試制度を安易に並列に扱わないでいただきたい。公立には公立の使命があり、拙速な決定は避けるべきだ。中学校では地域展開をして、高校でまた学校に戻るといって今の体制で、どこまでできるのか疑問であり、公立高校の使命や存在意義を改めて考える必要がある。

<まとめ>

- ・ 本日は、論点がたくさん出た。学校関係者とスポーツ関係者が同じ場所にいるこの委員会は非常に貴重である。「まずは試しにやってみる」と思えるものをいくつか出して、やってみるところから始めないと、何も動いていかないと考える。
- ・ 論点1の「アンケートデータの読み方」、論点2の「入試時期の前倒し」、論点3の「人・物・金のバックアップ」において、それぞれの立場によって意見が分かれたが、これだけ多くの意見が出たことが、次に繋がる大事な一歩である。